

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英才児のなまいき : 論理性の獲得に至る道筋を辿って
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 12 : 38 - 45
Issue Date	1985-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045134
Right	
Relation	



英才児のなまいき

論理性の獲得に至る道筋を辿って

葛西琢也

はじめに

英才児はなまいき現象を起こさないのではないかと考えてみたところに拙稿の動機がある。

知能指数一四〇以上の子ども達を、ここでは英才児として考えているが、この子達に於ては、普通児たちに見られるなまいき現象は起こり得ないと考えられる。同人諸氏の研究報告によれば、普通一般には、生きようとする姿勢が強ければ、つまり子ども達が持つ力の限界ギリギリを出した場合、いつも生いきなまいきになってしまうということのようにある。しかしながら、英才児達に同じ現象が起こらないのだとしたら、それは高知能であるが故のことだと考えられる。

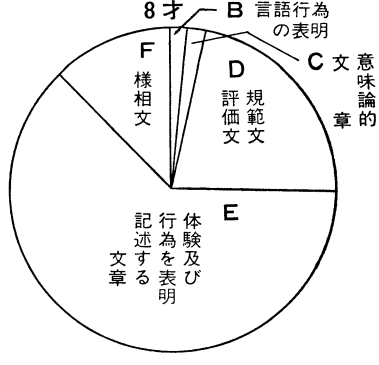
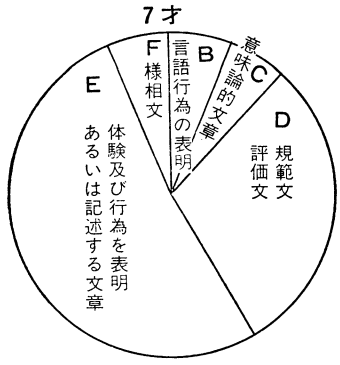
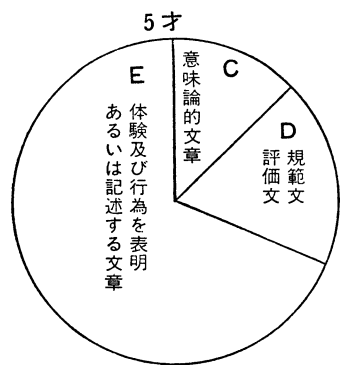
なまいきの成立基盤は対人関係意識であるというが、英才児はここで迷うことがないのだと考えられる。対人関係の中で、人は相手の気分をはかったり、思惑を考えたりと多大のエネルギーを費やしている。突っ張ってみることもあり、軽蔑することも、また逡巡することも多い。このような対人関係に於ける個々の現象のみならず、成長という尺度でこのことを考えてみても、英才児とそうでない子ども達との相違は著しいものがあると思われる。長い時間を経て整理をつける対人関係の問題が、英才児にはそもそも問題として成立しないということさえ有るであろう。彼等の直観が高い時限での解決をもたらすから、低時限の問題は素通りする結果になるのだと考えられる。

普通児が対人関係の中での問題を処理するために必要とする時間とエネルギーを英才児は他の面に振り向けることが出来るのだと考えられる。それは人間成長の階梯をより早く先に登ることであると言える。

このことは例えば、この子たちが年齢相応以上の論理的文章を書くことを見ても分ることである。ここでは方法として、英才児たちの論理的発達に着目してみようと思う。後に示すように、中には小学三年生で、成人と変らぬ論評のできる者もいるのである。

年齢相応以上の論理的文章を書くということは、間接的ではあるが生いき現象のひとつとして捉えることが出来る。だがそれでは、最初に示した仮説とまったく矛盾してしまうことにな

る。はたしてこの子は能力の限界ギリギリを出して書いているのであろうか。そうであれば英才児と言えども、生いき現象を起こすということになる。一方、まったく逆に論理的文章を書くということを意識することなく、自然に書いているのであろうか。高知能であるから論理的文章が書けるのだと言っても、それでは説明にならないのである。右のこの二点を考えることが、英才児の生いきを見ることになるものと思われる。合せて、論理的文章を書くようになるまでの、人間知能の伸び方の道筋を見てみたいと思う。論理とそれを支える意識の問題が残るからである。論理的文章を書くための書き方を習ったら、書けるようになるのかという問題があるからである。論



理的な文章の組み立て方を学ぶことができたにしても、そこに盛り込まれる意識内容、意識の動きがないことには文章にならないはずである。

意識とは常に何ものかについての意識であり、つねに一定の対象への関係ということが意識の本質性格である。この意識の特性を志向性と呼ぶのであるが、論理的文章を書くためには、そのための志向があるはずであり、ある一定の経過の後にその志向は獲得されるものと考えられる。論理的文章を書くに至るまでの志向性の変化の過程を、アウトラインだけでも辿ってみようと思う。

子どもの作文に右の志向性の変化、成長の過程を見つけたと思う。話者の行動の志向性をテーマにした文を志向的文と呼ぶが、作文からこの志向的文を集め資料とした。

志向的文については、須藤貢明と黒田巨に研究報告があるので参照して以下に述べる。

志向性あるいは志向的という概念は、文が生成されるときの話者の精神作用に基づいた反省的概念である。したがって、志向的文とは一つの物理現象とその文の生成にかかわる人の心を記述した文ということになる。それ故、志向的文は単純な命題に「思う」「知る」等々の「心」の表現を加えた高次の言語行為による文ということに

- なる。換言すれば、観察できるような物理的对象のみを記述した文に、その文にかかわる人の意志(心)を表す語を加えた文が志向的文である(例一)
- 物理的对象のみを記述の対象とした文は非志向的文である。(例二)
- 例一、太郎は荷物を持ってやった。
- 例二、太郎は荷物を持っていった。
- さらに志向的文と類別される文の六類型を次に示す。
- A、誰かが語ったことを再現し伝達する文・直接話法・間接話法**
- B、言語行為の表明**
- 約束、命令、嘆願や証言などの話者の意志を表明した、言語行為にかかわる文
- (例) 太郎は花子に結婚を約束した。
- 父の無罪を、太郎は証言した。
- などのような、その文を発生するときの話者の心情を記述した文。
- C、意味論的文章**
- 文章や、語、句、節などについて意味論的な用語を使っている文。
- (例) 日本狼は、まぼろしの動物を意味する。
- 太郎は、自分の正しさを彼の日ごろの生活で示した。
- などのような、ある対象を他の対象で置換するという話者の意図を表明した文。
- D、規範文、評価文**
- 行為の規範を示す文章や評価語を含む文
- (例) 学生は、政治に関心を持つべきだ。
- 早寝、早起きは体によい。
- などのような観察可能な対象(物理現象)が、行為者や、観察者の視点によって判断されたことを示す文。さらに、
- やり、もらい文
- 話者が相手に与えたと判断したり、相手から与えられたと判断したことを示す文であるから、
- (例) 写真を太郎に花子はとってやった。
- 犬は柱につながれていた。
- E、体験及び行為を表明あるいは記述する文**
- (例) 太郎は、山に行きたいと思った。
- 太郎は、金持ちになりたいと悩んだ。
- などのような、自分や他の人の心理状態を語った文である。すなわち、その文にかかわる人の意識を記述した文で、その背後に志向性が表明されている文である。
- Xは……する、した、するであろう、という形をとる行為の記述も、それが一定の意図(意向、志向)による行為であることを含意する記述であるかぎり志向的文と言える。

指向的文章の出現数と割り合い

	4才	5才	1年	2年	3年	
A						
B	1	0	1 (11)	2 (6)	1 (12)	
C	0	2 (13)	0	2 (6)	1 (12)	
D	0	3 (19)	3 (33)	10 (29)	18 (22)	
E	0	11 (69)	4 (44)	18 (53)	52 (63)	
F	0	0	1 (11)	2 (6)	10 (12)	
計	1	16	9	34	82	142

志向的文章の六類型

- A. 誰かが語ったことを再現し伝達するための文章
- B. 言語行為の表明
- C. 意味論的文章
- D. 規範文、評価文
- E. 体験及び行為を表明あるいは記述する文章
- F. 様相文

F、様相文

可能、不可能、必然、偶然といった言葉を含む文

(例) 彼女は、必ず行くだろう。
3の3倍は9であることは必然的である。

このような文は、話者の確信の程度を表明した文であるから、話者の心がその対象とされている。

以上がその六類型であるが、その内Aの型を除いた、五類型を作文中求めて、さらに集まった例文を手掛りとして、年齢毎の志向性の特徴、傾向を考えた。論理的文章を書くに至るまでの志向性の変化、成長の跡を辿ってみるのである。

以上ここまでの参考文献。「ことばの遅れた子の言語指導」

教育出版 一九八三年
須藤貢明・岸学 共著
「意識・言語・行為」 黒田 亘著
「心一身」の問題」

次に調査対象とした K の作品から「戸塚ヨットスクールの教育に思う」と題した論文の全文を示す。

作者の K 「は昭和四九年七月二四日生れ。武蔵野市の私立聖徳学園小学校の四年生である(担任・草野修三氏)。作品は三年生、九才の時のもので、夏休みの自由研究のひとつとして書かれた。

戸塚ヨットスクールの教育に思う

まえがき
私の本だには、十何冊かの非行

の本が、並べられています。最近の私は、新聞を読む度に、少年の非行問題が目につくようになりました。シンナーによるショック死、浮浪者殺傷事件、恐喝、窃盗、様々な型の非行が、紙上を賑わせています。初めのうちは、随分悪い事をする人達がいるんだなあ、と思う程度にしか、関心を持っていませんでした。しかし、「積木くずし」という一冊の本を読んだから、「非行」という言葉が、妙にひっかかるようになりました。

生まれた時はみんな同じなのに、どこから分かれてしまうのだろう。

そんな単純なこだわりが、何冊もの非行に関する本を読む事になりました。ちょうどそんな時、「戸塚ヨット校長逮捕」という記事を読みました。「訓練生の小川真人君(当時一三)に対し、態度が気に入らないなどと因縁をつけ、ヨット訓練などに名を借りた制裁として、それぞれ木刀、鉄けん、ヒザなどで頭や腹など全身を数回にわたり繰り返し殴ったり、けつたりした。また堤防上から海に突き落とすなど暴行を加え、その結果、十二日午後十一時三十分ごろ、常滑市民病院で外傷性ショックにより死亡させた疑い。……」と書いてあります。

人が死んでしまいう程の訓練とは何

なのだろう。そこでは、どんな教育をしているのだろう。そんな疑問が、頭をもたげてきました。

「戸塚ヨットスクール。」どこかで聞いたような名前です。さっそく、私は本屋で、「スバルタの海」という本を買いました。

ヨットの訓練を通して、子供たちの体力、精神力を鍛える事を目的として開校したという、戸塚ヨットスクール。いまや、登校拒否児や非行児の治療矯正機関として、役割を果たしているかのように見える、ヨットスクール。

その中で、一体何が行なわれているか、そこで行なわれている治療の本質は何なのか、また、スクールという名目の中で行なわれている教育は、果たして教育という言葉に値するものなのだろうか、大きな疑問を投げかけてきます。

まるで、山道で落石にあった時のように、次々となだれ込む疑問に、考える間もなく、ただ頭が混乱するばかりです。

そして、その後やって来たものは、言い表しようのない、怒りと、戦慄でした。

戸塚ヨットスクールの教育とは

戸塚ヨットスクールにとって、教育の目的とは一体なんなのでしょう。戸塚校長は、次のように語って

います。

「自分の未熟さ、限界を思い知り、自分が生きるために必要と感して、自ら学ぼうとする。それが教育です。」

確かに、現在の自分に満足してしまつたら、自ら学ぼうとする意欲がわかず、また、向上もないと思いません。

そういう意味で、戸塚校長の教育論を言葉通り解釈すると、それも一つの、教育に対する考え方として納得できます。しかし、そこには、同時に人間としての、「心」の教育がなされた場合に限りません。

ところが、戸塚ヨットスクールの足跡をたどってみると、教育になくてはならないはずの、「心」の問題が無視されています。

「一人前でない子供の自主性を尊重するとか対等に話し合うなど、悪しき平等主義」と批判し、命令と服従こそが、教育と子育ての基本原理であると主張する、ヨットスクールの考え方を、私は教育と認める事ができません。

人間と認めないところに、教育があるのでしょうか。私は、教育とは何かと聞かれたら、命の尊さ、生きる事の喜びを教える事だと言います。いいかえれば、人間である事すばらしさを教える事だと思いません。

大自然に比べると、人間の命は、

ほんの七十年八十年、そのはかない命をどのように生きようと、一度だけの「生」なのです。そして、どのように生きていくか、道を選ぶのは、自分自身です。

どんなに一生懸命道をたどっても、人は迷います。迷いながらも自分で棍をとり、航路を見つげながら進まなければいけないのです。

だからこそ、人間は、「愛」というものに支えられながら生きていかなければいけないのです。

どんな立派な教育論を看板にしようとも、愛のない教育に、人間の成長はありえないと思います。

体罰の影に隠されているもの

戸塚ヨットスクールの、唯一の教育手段は、体罰です。鉄拳で胸を殴る。足で顔を蹴る。ヨットの訓練という盾を前に、そんな事を公然とやっています。容赦ない体罰の繰り返しによって、コーチへの服従を教えこまれます。子供は脅え、恐れ、コーチを絶対とする主従関係が作りあげられます。そこから教育が始まるというのです。

確かに、自分の命が脅やかされる程恐ろしい存在の前では、考えられない程従順になるでしょう。けれど、それは、あくまでも心を閉じた中での従順です。

自分の意志とは関係なく、言われ

るまま行動する。そんな閉じた心に、どんな指導をしても、人間として成長する事はないと思います。

たとえ、どんな困難にも耐えられるようになったとしても、精神力がついたと解釈する事は出来ません。

私にはヨットスクールが、まるでむちを持って動物に芸をしこむ、調教師に映ります。

戸塚校長は、今まで五百五十人の子供を治してきたと、お経のように繰り返します。

しかし私は、「愛情」のない教育と閉ざされた心に、健康な精神が養われるだろうか、疑問です。一見問題がないようにみえたとしても、小康状態を保っているだけではないのでしょうか。登校拒否児が学校へ行き、家庭内暴力がおこななくなつたという、現象面だけをとらえる事に、問題はないでしょうか。

もしかししたら、再びヨットスクールへ送り込まれる恐怖がそうしているのかもしれない。

それでは何の解決にもなりません。むしろ、ヨットスクールの体験が、もっとも恐ろしいものをうみ出すかもしれない、危険があります。

戸塚校長は、週刊誌のインタビューで恐ろしい事を言っています。

「家庭内暴力を治すには他人の冷た

さを教えればいいんです。人間を殺

す方法を考えてみたらいいんです。

殴る、けるの体罰。このほか、エネルギーを断つこと。飯を食わさんとです。もう一つ、今うちが利用し

たる方法は、酸素を断つことです。水の中では呼吸ができなから苦しい。常に生存本能を刺激されとる。」

傷ついて、人間を信じる事の出来ない心の病にかかっている子供に、人間の冷たさを教えてどうなるでしょう。人間を信じる事のできない不幸を背負わせる事が、なぜ治療につながるのでしょうか。

「狼に育てられた子」という本があります。その少女は、骨格が曲り、ひざまづく事さえ出来ません。狼に育てられてしまうと、「人間」さえ狼になってしまうのです。

では、「戸塚ヨットスクール」という冷たさの中で、子供はどんな大人になってしまふのでしょうか。

「環境は変わらないから、子供を変える。」という戸塚校長。

人間は環境の中で育ち、成長していくものです。環境が変わらなければ子供を変えるところに、無理があるのではないのでしょうか。

どんな子供たちも、ある日突然間た一人、と犠牲者を出してしまいました。もうすでに、三人の死亡者と、二の行方不明者を出していま

題を抱えてしまふ訳ではありません。十年二十年と、自分の生きてきた歴史の中で、徐々に病んできたものだと思います。

そう考えれば、心の病の原因は人それぞれ違い、それを探り出さなければ、治療はないのではないのでしょうか。それは長い年月のいる事です。しかし、戸塚校長は、「情緒障害は、すべて精神力が足りないから、体罰を通して、精神力をつければよい。てんかんも、心身症もすべて体罰で治る。教育とは簡単だ。と言っています。飛ぶ鉄拳で短期間に問題を解決しようとする、戸塚ヨットスクール。心を閉ざした地獄のような苦しみの中から生まれるものは、一体なんなのでしょう。

小川真人君の死が意味するもの

私が、戸塚ヨットスクールを知るときかけとなった、小川真人君の死。三十八、九度の熱のある体を、海水につけられて、火にさらされて、体に無数の傷を残して死んでいった、小川真人君。これは、もう殺人です。なぜ、これまで戸塚ヨットスクールを放置しておいたのでしょうか。遅過ぎたのです。いつまでも見逃していたばかりに、また一人、ま

す。そんなスクールを放って置いたのが、私には、恐ろしくなりません。このままずっと放置しておいたら、五人の犠牲者が六人となり七人となりかねません。戸塚ヨットスクール。コーチたちにも親たちにも、疑問を感じるので。

私が第一に驚いたのは、戸塚校長が逮捕された当日までも、問題を抱えた親たちが、入校を希望してきたというのです。親がどんな気持ちで子供を連れて来たのだろうか、いくら考えても理解出来ません。戸塚ヨットスクールへ入れれば死ぬかもしれないと分かって、それでも入れる。それは、親の責任を放棄する事です。「両親」という美名のもとに子供を地獄へ突き落とすようなものです。親のする事ででしょうか。考えようによっては、「殺人」とも言えるのです。

一方、死を覚悟の上で入校させるしか解決の道はないと、ヨットスクールを頼る親たちが大勢いるこの現実で、教育者たちは、ただだまって見ているだけでいいのでしょうか。手を借さない社会の責任はどうなるのでしょうか。

真人君のお母さんは、言っていました。

「真人は『人柱』になったんですね。あの子が死んだ事でスクールが

検察に暴かれもしたでしょう。真人にとって本望かもしれません。」
皮肉にも真人君が死亡した事が、戸塚校長の逮捕につながりました。

「……小川君の入校後一週間、戸塚とコーチらが必要以上に殴ったり、けつたりしていた事実を突き止めた。」

このため、体力的に劣っているのにかかわらず、情緒障害児への治療範囲を逸脱した暴行を加え、さらに体調の異常に気付きながら適切な処置を欠くなど、「故意性」の疑いが強くなった、として強制捜査に踏み切り、十三日、東京、神田駿河台の山の上ホテル前の道で戸塚を逮捕した。」

このように死亡者を出しておきながら、戸塚校長は、訓練方法に落ち度が無いとして、

「……専門家という人や、他の所は、確かに人は殺さないかもしれない。しかし、だれ一人として治せない。私の所は、殺すかもしれないが、年間にして三百人を超す人を治している。目的は達しなくとも、殺さなければ、それでいいのか。」
と、一気にまくしたてたといえます。

殺しても治せばいいという考え。目的のために手段を選ばない、戸塚式教育の本質はここにありま

す。スクールという名を借りて行われ

てきた体罰は、実は暴力であ殺り、人だったのです。教育は、「愛情」で支えられなければならないのです。「愛情」を否定した戸塚ヨットスクールは、教育を売り物にした、株式会社だったのです。

一、感情へ向かう志向

おこるのがなければいいな
そうすれば、おこられなくてす
むもの

そして、いっしょにあそべるもの
なんでもして、あそべるもの
みんなでいっしょにそうだしよ
う

こそこそこそ、きいまった
そうだんきいまった
みんなでいっしょにちからをあわ
せて

おとうさんにいおう
おかあさんにいおう

四才で書いた詩であるが、志向的文章の最初の萌を感じる。集まった資料の内、四才の時のものは右の例のように詩の形式をとったものが全てであることもあってか、志向的文章の採集例はこの一例だけであった。志向的文章が明確な姿を持って書かれるようになるのは、この時期以降の事であるように思

だ。
五才になると、所謂、作文の形をと

って書くようになり、自分の考え、意見を述べる姿勢が強くなっている。一方で虚構への関心も強く、物語形式のお話も数多く書いている。

五才代では、E体験及び行為を表明、記述する文章(69%)、C意味論的文章(13%)、D規範文、評価文(19%)の三類型が出現している。その内最も出現率の高い、体験を表明、記述する文章をまず取り上げてみた。

E₁ 私は大人になったら、おいしゃさんのはかせになるつもりです。

(五才六ヶ月)

E₂ 絵は楽しいものばかりではないということが、わかりました。

(五才八ヶ月)

E₃ 「さけび」の絵を見てみると、なにかこわいめにあうような、くるしい気分になるのです。

(五才八ヶ月)

E₄ おいしゃさんのはかせになるには、どうしたらいいのです。

(五才七ヶ月)

これらEの文章は、自分や他人の心理状態を語っているのであるが、自分の気分、感情を追う志向が育って来ていることに着目せねばならない。単なる気分、感情の表出ではなく、自己の意識を振り返って見る視線が獲得されているということであろう。自己を対象化して、客観的に観る、感情処理に至る志向がまず育って来ているという

ことであろう。この志向は、感情を冷やし適切な行動へと導き、対人関係でも迷うことが少なかったものと考えられる。つまり、はじめに述べたように、突っ張ってみたり、軽蔑してみたり、逡巡してみたりといったことに、あまりかかずらうことなく過すことができるのである。

E₁のような「つもりです」が三例、E₂の「わかりました」が一例、E₃の「気分になるのです」が一例、E₄の「どうしたらいいのです」が一例、さらに「思います」が三例、「思っていました」が一例、「なりたいたいです」が一例と、合せて十一例であった。

説明がどくなるが、志向性と言語行為の関係に触れておきたい。右に取戻したようなことは示めされる「再帰的もしくは反省的な言語行為が、そもそもわれわれの意識のエッセンスである」のであって、黒田亘はこの意味で意識は基本的には言語過程であると述べ、その立場からさらに次の様に述べる。「体験とは人格的・志向的な複合体であり、そういう複合体の内的な構成契機としてひととこととを結びつけるのが反省的・再帰的な言語行為の働きなのである」と言っている。六つの志向的文で示めされる志向作用の内、最も早期に活動を始めるのは、自分や他人の心理状態や意図を追うものようである。勿論、その始動

時期に個人差があることではあるが、一般的に考えてみても先駆けとなる志向はこれであろう。

次は意味論的文章である。ある対象を他の対象で置きかえるという意図を持った文で、「指示する」「表わす」「意味する」「真である・偽である」などを使って語られるものを言う。

C₁ がんばるといふこと、それは人間にとつて考えるといふことなのです。

C₂ 私は、今、たびをしているさいちゅうだ。

(五才九ヶ月)

などのような意味論的文章は、先ず自己を対象化し、客観化して捉える志向が育って来いなければ成り立たないものである。対象が対象として捉えられていなければ、意味論的文章の、ある対象を他の対象で置き換えるというようなことは不可能になって来るからである。

例文C₂に注目したい。ここには既に人生を捉えようとする構えが見られるように思う。時の流れの中に、自己の生きる姿勢、態度を構築しようとしているのだと言えよう。そしてこの構えの構築には、対象を他の対象で置き換えるという志向が、イメージアップとして作用していると考えられる。

このような自己の生きる姿勢を問う構えと次の価値への志向は、無縁のものとは思えないのである。これは評価

文に見られるものであって、三例採集されている。価値への志向がやはり五才九ヶ月というような早期に現れたことには特に注目させられるのである。

C₁ よく「かわい子にはたびをさせ」といふが、それはほんとうだ。英才児であるが故の特殊な傾向なのであるが、彼等が人間成長の階梯をより早く登っていくことを可能にしていく条件のひとつに、この早期に於ける価値の獲得があると考えられる。

二、価値へ向かう評価的志向

体験及び行為を表明、記述する文は、二年、三年となるに従って、その文の種類が増えて来ている。これは、この時期の傾向として、自分なり他人の心理状態や意図への志向性の分化がなされていることを示していると考えられる。一年生時の資料が十分集まらなかったため類推になるが、この頃から始まっているものと考えられる。

一方、同じように年齢が上がるに従って志向的文の総数が増えて来るのは当然のこととしても、Eの体験及び行為を表明、記述する文の志向的文全体に対する割合が、五才代69%、七才代53%、八才代63%と、常に五十パーセント以上の高率を占めていることに注意したい。これが英才児に於て見られる特殊な現象、片寄りであるとしても、一般に我々が想像する以上に、子

ども達が対人関係意識の中に解決すべき課題をいかに多く抱えた日々を過しているかを語っているものと見る事が出来る。

E₅ 私は、はずかしいという心の底にあなたの痛みを感じます。

E₆ 一日でも早く、あなたの家庭に笑い声もどって来ることを願っています。

E₇ 舞台の袖に入った時、道ばたの落ち葉が風に吹かれて、ざわめくように胸が鳴るのを覚えました。

E₈ 自分の人生が、他人の手によって決められてしまう事への不安なのでしょうか。

E₉ 罪をおかしたという結果だけで、あなたを責める事はできないような気がします。(以上八才)

その他のものを文末によって示すと、「思いません」が二例、「見えたり、感じたり、考えられたりするようになりました」、「目の前が、真っ暗になってしまったのです」、「見えてきた」、「信じています」、「どう思うでしょうか」、「怖かったです」がそれぞれ一例ずつ、E₉を含めて「気がします」が四例、「おい込んでしまったのです」が一例の計十八例である。五才代では見られなかった新しい志向をいくつか見ることができるようになる。中でも、「願っています」「信じています」「見えて

きた」などは、人間行動、人間感情に美意識、価値を求めるようになっていく兆候ではなからうか。

先に述べた自分なり他人なりの心理状態や意図への志向の分化と、このEの文の志向的文全体に占める高い割合が示めしているこの志向の集中は、同時に他の志向の発動を促すことになっていると考えられる。二年に於て規範文、評価文が五才代の三例29%から十例29%へと、三年では十八例22%に、また様相文が二年の二例6%から十例12%へと増加していることに注目したい。

D₂ 太郎君、自由に自分の気持ちで話せるそんな楽しい事はありません。

D₃ 人がいるための国なのに、人を殺しても国を守る。こんな矛盾した話があるだろうか。

D₄ そこに一心に考える姿勢と論理的思考の必要性が出て来るのです。この事は人間が生きていくうえで、もっとも大切な事であり、必要な事です。(八才)

D₅ 人間である以上、誰でも夢を持って生きようと思う時があります。(八才)

生きる姿勢への関心が増えます。強く、また本質を掴もうとする姿勢がはっきりして来たように思える。そして把握されたものは、ひとつひとつが確

信を持って語られている。

人と世間、人と時間、その間に生じる出来事を捉え判断を下して行く。価値へと向かう志向の台頭である。何に価値があり、どれにないかの価値意識が早期に獲得されたのである。どう行動すべきか、何を目標として生きて行くべきかという生活の姿勢、生きる姿勢が明確になって来たものと考えられる。

関心は人間について、世の中についての事柄に限られて来る。死、戦争、友情、教育などが取り上げられるようになった。

次のような意味論的表明がなされるのも自ずからのことであろう。

C₃ バレエは、私の人生の道しるべなのです。(八才)

C₄ 偶然と偶然の積み重ねが今の私なのです。(八才)

しかし、実際の関係は右で述べたものとはちがいで、逆であろう。評価的志向が意味論的志向の発動を促すのではないであろう。寧ろ状況の中の自分の位置や対象の姿を明瞭にする意味論的志向が、評価的志向の発動を容易にしているのだと考えられる。

以上、ここまでは意識的志向性を中心に見て来たが、記号の志向性とも言うべき側に立つ、チャールズ・モリスの記号論の立場からも簡単に触れてみたい。

モリスは人間を生物に還元して、環境と反応との関係として、言語を記号に還元せしめていると考えられる。モリスは「記号は、生物に向かってあるものについて告知し、対象を優先的に選択するのを助け、ある行動科の反応連鎖を誘発し、記号によって生み出された行動(受記号体志向)を具体的な全体に組み立てるために使用される。」と言っている。そして、これらの使用は順に、告知的、価値的、誘発的、体系的の記号使用と呼んでいる。この右の四つの記号使用成立時に、言語記号に託された言語記号それ自身の能力が、その使用者に与えられていることになると考えてよいものである。

規範文、評価文は、記号の価値的使用として説明されよう。モリスに従えば、「記号の価値的使用では、ある対象、優先、必要、反応、記号に優先的行動を与えるために記号を使用すること」と言い、評価的適切性を測定しているという。

一方、意味論的な文章、体験及び行為を表明、記述する文章は、告知的記号使用として説明できよう。「記号の告知的使用では、記号がそれがしの場面が、それがしの特性を持っているかのように、ある人に行わせしめるために提出される。」と確信性を測定しているという。

※チャールズ・モリスについての記

述は上原輝男先生の「小学校国語教材研究序説」を参照及び引用した。

三、体系的志向及び生きようとする構え

三年生になつてまず目につくことは文章が論文の形式を取るようになった事である。振り返つて見ても、五才でまとまった文章を書くようになってから、作品の中には学校国語教育が目標にする見たこと、したことを時間の順序で書くというようなものがまず見当らないことである。そのような文章があつたとしても、それは自分の考えを述べるための説明として必要だつたといふことである。自分の考えを述べるため、確認するために書いて来たといふことであろうか。そして、論文を書くようになるまで四年、一気にこまで突き進んで来た感がある。しかし、それは論文を書くための猛訓練があつたといふような事ではない。全てはその志向性の故なのであると思う。

では論文を書くようになってから、その志向はどう変化して来ているのかを見てみよう。

E₁₀ その中で、一体何が行なわれているかそこで行なわれている治療の本質は何なのか。

E₁₁ また、スクールという名目の中で行なわれている教育は、果たし

て教育という言葉に値するものなのだろうか、大きな疑問を投げかけてきます。

E₁₂ まるで、山道で落石にあつた時のように次々となだれ込む疑問に、考える間もなく、ただ頭が混乱するばかりです。

E₁₃ そして、その後にはやつて来たものは、言い表しようのない、怒りと戦慄でした。

先に見た評論の一節である。頭が混乱するばかりですと言いつつながら、しかし自分の道筋をいねいに拾つていけていることに注目したい。論理的飛躍が見られないのである。それは自分の意識の流れを素直に追うことが出来るからであろう。そのためにはEの自他の心理状態を追う志向、さらにFの意図を追う志向、Cの意味論的な志向が発動していなければならぬだろう。モリスの告知的記号使用の獲得である。勿論、価値的記号使用の能力も獲得されていることは見て来た通りである。

D₆ 大事な事は、最後に人間としての理性を取り戻す事なのです。

D₇ ヨットスクールの考え方を私は教育と認める事ができません。

評価的志向文であるが、ここにはモリスの四つの記号使用の内の一つ、体系的記号使用の能力が働いていることが認められるのである。モリスによ

れば、それは「記号の体系的使用というものは、ほかの記号がひき起こそうとする行動を体系化(組織化)するための記号の使用である」と説明される。論の構成、論の運びなど、論述が統一されるためにはなくてはならない能力である。

D₈ 殺しても治せばいいという考え、目的のために、手段を選ばない戸塚式教育の本質はここにあります。

論理のパターンを応用した論の運びであると言えよう。

D₉ 確かに、自分の命が脅やかされる程恐ろしい存在の前では、考えられない程従順になるでしょう。けれどもそれはあくまでも心を閉じた中での従順です。

E₄ 人間は環境の中で育ち、成長していくものです。環境が変わらないから、子どもを変えたいところには無理があるのではないのでしょうか。

事柄と事柄の間につながりを見い出して行く能力、これも体系的用法の一つであろう。体系的志向と言うべきものが獲得されているのだと言つてよいものであろう。であるからここには、論をまとめ上げようと四苦八苦しているような気配はどこにもない。志向が追つて行く所に素直につら

く、そこに自然に論が組み立てられているということであろう。俗な言い方をすれば、背伸びしようとする姿勢が感じられないのである。生いき現象は英才児に於ては見られないと言えよう

それとともに、「大きな疑問を投げかけて来ました」「無理があるのではないでしょうか」「いくら考えても理解できません」と常に相手を意識した、読み手を意識した記述になっていることに注意したい。つまり、体系的用法を獲得しつつも、全体を包んで、告知的用法が見られるということである。ここにも生いき現象を感じさせない理由があるようである。さて、

一方評価的志向、価値へ向かう志向は増々先鋭化し、核心へ向かつている。

D₁₀ 人間には、時に、生命をもかけて守らなければならぬ「正道」がある事を教えてくれました。

D₁₁ 人生の幸福は、「死」が早いかわいからではなく、生きる事にどれだけ情熱を燃やす事ができるかという事だと思います。

D₁₂ 「生」と「死」の狭間で何をすればいいのか、どう生きればいいのか、人生の終局的な問題は、ここにあると思います。

この鋭角的な生きて行くとする構えを無視して、英才児の論理性を考えると出来ないうである。

(聖徳学園小・葛西琢也)